

私の戦後体験

舛森 順一

終戦は、私が国民学校1年生の夏休み中に迎えた。遊びから家に帰ると、近所の大人たちが、「戦争に負けた」と言い合って、泣いて涙を流していた。

私の生まれたところは、南樺太の^{みなみからふと}本斗郡内幌町^{ほんとうぐんないほろちょう}という所で、^{まみやかいきょう}間宮海峡側の、北海道に近い南の方にあつた。人口は1万1,200人位で、三菱石炭油化工業株式会社・内幌石炭鉱業所があつた。石炭を掘り出すだけでなく、大きな^{かんりゅう}乾留工場があつて、どのような製品を製造していたのか、よくわからなかったが、ピッチ(石炭コールタールからとる粘液質の物質)がその周りにあつた。

山は遠くにあり、炭鉱は平地にあつた。炭住(炭鉱住宅)、小学校、病院、会館、購買所、商店などがあつた。

戦後に移り住んだ、美唄市東美唄町の三菱の炭鉱は山々が近くにあり、平地が少ないのでびっくりした。また、近くを流れる川の水は黒く、初めて見た時は驚きであつた。樺太の、私の家の近くにあつた川は冬には凍って、氷の厚さが50センチ程にもなり、馬車が道路代わりに行き来していた。だから、美唄の川は凍らないことも驚きであつた。樺太は雪も多く、長屋の屋根の高さまで積もつた。玄関から登り階段を作つて、屋根の高さにある道路に出た。冬は、吹雪のため、道路に高い吹き溜まりが何カ所にもでき、学校が休みになることがあつた。電話も普及していないので、吹雪の朝、各家庭の電灯を点滅させて休校を知らせた。

父は、樺太で北海道への出稼ぎを中心とした漁師をしていたが、いつごろか辞め、内幌炭鉱に勤めた。初め、父は一般鉱員の職に就き、六軒長屋住まいをしていた。トイレ、水道、浴場はすべて共同使用だった。その後、^{はっぱ}発破係(火薬等を使用して、岩を爆破し、割ったり、^{くだ}砕いたりする職)の下級職員に昇格して、水道・トイレ付の2戸建の社宅、8畳と6畳2間^まに台所付きの、狭い住宅に住むようになった。それでも六軒長屋に比べると立派な住宅であつたが、やはり浴場は付いていなかった。

樺太^{からふと}のロシアとの国境近くは、戦闘があつて戦死者も出たようであるが、私たちが住んでいたところは、戦渦^{せんか}に巻き込まれることもなく、無事であつた。終戦時には3歳年下の弟、1歳にならない妹と住んでいた。終戦2年後に生まれた弟は、栄養不足から、40数日後に死亡した。私がロシア製の黒パンを配給所へ買出しに行っていたが、帰った時に、ピクリともしない真っ白な冷たい死に顔と対面して、人間の死を初めて体験した。

住宅は、学校左側 500 メートルぐらいの所にあつたが、戦時中は、学校の行き帰りは、わざわざ正面側に1キロほど遠回りして、奉安殿^{ほうあんてん}の前で頭を下げ、そして兵隊が見張っている櫓^{やぐら}のある場所で、「兵隊さん、おはようございます」、「兵隊さん、さようなら」と、大きな声で挨拶^{あいさつ}をした。学校では、「今日は喧嘩^{けんか}した者はいないか？」と先生に聞かれた。そして、「勝った者は？負けた者は？」と言われ、手を挙げて「勝った」と、答えた者には、「弱い者をいじめてどうする」と、「負けた」と返事した者には、「そんなに弱くてどうする」と叱^{しか}っていた。国語の授業で教科書の「サイタ サイタ サクラガ サイタ」、「ヘイタイサン ススメ ススメ チテ チテ タ トタ テテ タテ タ」を大きな声で読まされた。

他にも、防空頭巾^{かぶ ぼうくうごう}を被り防空壕に避難する訓練や、水の入った消火用のバケツのリレー渡しの訓練もさせられた。また、「カッテクルゾト イサマシク、チカッテ クニヲ デタカラ ニャ テガラタテズニ オリヤリョウカ、シングンラッパ キクタビニ、マブタニウカブ、ハハノカオ」、「マモルモ セメルモ クログネノ ウカベル・・・(後の歌詞は思いだせない)」などの軍歌を、しょっちゅう大声で、トイレの中、道路を歩きながら一人で、また友達と一緒に歌った。私たちの子どもの頃は、どこことなく、なんとなく自然に中国人を「チャンコロ」、朝鮮人のことを「ハントウ」と呼び、日本人より劣^{おと}った人間として蔑^{さげす}んでいた。

防空頭巾（ぼうくうずきん）

空襲の際に落下物から頭などを守った綿入れの頭巾。各家庭にあつた衣類などを再利用してつくり、子どもたちは、登下校や移動の際に携帯し、空襲警報が発令されると、すぐさまこれを被って避難した。防空頭巾には、名前や血液型を書いた名札をぬい付けてあつて、何かあつたときに誰なのかわかるようにしていた。

戦争が終わり、1年生は何とか修了することができたものの、2年生の1学期の終わりから、日本人の学校がなくなり、学校に通うことができなかった。昭和23(1948)年10月ごろに本土に引き揚げて、父母の故郷である岩手県久慈市^{くじし}侍^{さむらい}浜^{はま}町^{まち}麦^{むぎ}生^おに疎開して、複式の麦生小学校4年生に転入するまで、2年生、3年生、4年生の2学期11月までの2年半以上、学校に通っていなかった。カタカナは読めるが、ひらがなは怪しく、九九はできたが、割り算は全然だめで、学校から帰ると従兄^{いとこ}に勉強を教わった。父は小学校の先生と、「もし勉強について行けないようだったら、落第させても構わない」と約束していた。毎日の努力の結果、何とか落第せずに4年生を終了し、5年生の3学期初めまで通学した。

また、終戦後、それまで蔑^{さげす}まれていた朝鮮人が、急に威張^{いば}り出し、日本人に高圧的になり、いやがらせもするようになり、日本人が耕していた畑を勝手に奪って取り上げ、鉄砲を持って見張っていたのを見て恐怖を感じた。

朝鮮人に関して、今でも忘れられないで目に浮かんで来るつらい記憶がある。戦後、数年が経^たったある夏、親しくしていた朝鮮人の子どもと、私の弟、妹を連れて裏の近くの川に泳ぎに行った。3人が深みの方に行こうとしたので、大声で「危ないから川の水の色が濃く見える前の方に進むな」と怒鳴ったが、弟妹は日本語が通じて引き返してきたが、朝鮮人の子どもは分からず、深みにはまってしまった。私は周りに助けを求めたが、助けに来てくれる人はいなく、その子は可哀^{かわい}そうに溺^{おぼ}れ死んだ。そして深みにはまり、溺れ死ぬ現場を目撃したことが、今でも脳裏から離れない。人間は溺れ死ぬ時、深みにはまると、すうーっと身体が沈み、間もなくものすごい勢いと速さで、水面から3メートル以上もの高さ^{とびは}に飛跳ね、また沈み、飛跳ね、だんだん振幅が小さくなり、沈んだまま浮きあがってこなくなってしまう。これが溺死の瞬間の状況であった。間もなく捜索隊が来て、川の中をあちこち探したが見つからなく、死体は下流に流されて沈んでいた。大きな竿^{かぎじょう}についた鉤状の物で、死体をひっかけて引き揚げた。その子の母親が来て、張り裂けんばかりの大声で、「アイゴ、アイゴ(朝鮮語で大きな驚きや悲しみを現す語)」と泣いていたのが忘れられない。

戦後間もなく、日本領だった南樺太にロシア人が住むようになり、女性の炭鉱婦が私たちの家に住むようになった。少しして、その女性が出て行ってから間もなく、子供のいる一家族が住むようになった。ロシアでは、女性が、炭鉱の坑内に入ったり、学校の先生、医者

していた人が多かった。一緒に暮らして見て、ロシア人に特に違和感は感じられず、同じ人間であると思った。数人集まるとすぐ合唱になり、「カチューシャ」や「カカリンカマヤ」等のロシア民謡を唄った。ロシア人は歌が好きだなと感じた。しかし、ある時ロシアの兵隊が数人で私の家に押し入り、金目のものを要求したが、銃を突き付けられた父が胸をたたいて、「殺せるものなら、殺してみろ」と叫んだら、懐中時計を1個だけ奪って帰ったそうだ。

敗戦によって、生活は激変し、食べる米は手に入らなく、自分たちで作ったジャガイモ、カボチャ、トーキビ（トウモロコシのこと）、大豆など自給自足の生活であった。食べ物を請う乞食^{こじき}が家を回って歩いていた。味噌^{みそ}、醤油^{しょうゆ}、納豆も手作り。煮干^{にぼし}の代わりにニシンを煮て干して出汁^{だし}を取った。ビート（甜菜^{てんさい}のこと）を薄く切って煮て糖分を取った大根のようなビート糟^{かす}と、大豆、昆布を煮込んだものを朝、昼、晩、ジャガイモ、カボチャとともに食べた。このような食生活は3年ぐらい続いた。小麦粉が手に入るようになってからは水団^{すいとん}を作って食べた。ジャガイモをすって作った芋団子^{いもだんご}（これはいま食べても美味しいが）も良く食べた。父はタバコを吸ったが、タバコも手に入らなくなり、タバコを栽培し乾燥させて自分で作って吸った。お酒もどぶろくを作って飲んだ。

ロシア人が来てから、多少食事も良くなり、黒パン（ライムギで作った黒ずんだパン、ロシア人の主食）が手に入るようになり、ヤシ油のバターを塗って食べた。オートミールも食べることができた。塩ニシン、塩鮭をロシア人に倣^{なら}って生で食べた。エンドウ豆も生で食べた。初めは青臭かったが慣れた。

そのうち、親しくなったロシア人から白パンも手に入れることができるようになった。やはり黒パンよりは美味しかった。現在、私たちが食べる食パンよりもおいしかった印象がある。カンセーロ（正しい発音ではないと思うが当時私が聞こえた単語：肉等の缶詰のこと。）も手に入って美味しく食べた。穀類は、コーリャン、麦、外米（細長く臭いがあるパサパサする米）で、少しずつ手に入るようになった。黒パンは配給制で、買い出さなければならなかった。

ロシア人の家にも遊びに行けるようになったので、片言のロシア語を話すことができるようになっていたのであろう。ロシア語を話す中で、文法らしきものも自分なりに判断して使っていた。この経験が、のちに英語の教師をする土台になったのかもしれない。果物はせい

ぜい乾燥バナナぐらい。他には山ブドウ、コクワを山で採って食べたり、鶏やウサギを飼って食用にした。

父は幼少の頃からの喘息持ちで、戦後間もなく発作を起こした時、病院もロシアのものとなっていたので、病院に行かないで、近くの知り合いの獣医に上腕に注射を打ってもらったが、かえってそれが化膿し、結局ロシアの病院で手術を受ける羽目になった。そのため、日本引き揚げのタイミングが狂い、そのままロシアの炭鉱で働くことになった。

発破の技術を持っていることが重宝がられ、割と高い給料で働くことになり、すぐ日本に引き揚げることを許してもらえなかった。「強制労働をしたら帰国の権利をもらえる」と聞いて、母が土方や、ニシン場での強制労働を行い、その権利をもらったので、帰国できることになり、父は会社は無断で、引き揚げ者の乗った南樺太北部の真岡行きの貨車の中で身体を隠し、逃げる様にして真岡へ向かった。日本引き揚げが始まったとき、真岡は引き揚げ者の収容所となった。そこは粗末な施設で、女子トイレも中の間仕切りもなく、地面に大きな穴を掘っただけで、その上に何枚かの厚い板を渡したものだ。その上をまたいで用を足すのだが、部屋はプライバシーも守れず、最低の生活しかできなかった。食べるものも粗末で、お腹が空いて困った思い出がある。

一カ月余りそこにいて、いよいよ引き揚げ船「第二白龍丸」に乗船して函館に向かった。母は船に弱く、ひどい船酔いで、三日三晩トイレに入りっぱなしだった。函館に着いてから、栄養失調の人が多く、シラミが頭から身体一面に湧いているので、いきなり白いDDTを頭からかけられ、消毒された。帰省先は、父母の故郷である岩手県久慈の麦生に落ち着いた。

DDT

ジクロロジフェニルトリクロロエタン dichloro-diphenyl-trichloroethane の略。有機塩素系の殺虫剤、農薬。戦後の衛生状況の悪い時期、アメリカ軍が持ち込み、シラミなどの防疫対策として用いられ、外地からの引揚者や一般の児童の頭髪に粉状の薬剤を噴霧した。

父は、昭和 24（1949）年夏に、樺太の内幌炭鉱時代の上司を頼って、北海道美唄の三菱炭鉱に勤めることが出来ることになり、単身赴任をした。残された家族は、昭和 24（1949）年の夏頃から麦生部落の海拔 200 メートル下の浜辺にある、漁船・漁網などを保管してある納屋で、アワビ干しの管理を任されて生活することになった。そこでの生活を半年以上してから、父のいる美唄に昭和 25 年 2 月に来た。小学校 5 年生の 3 学期のことだった。樺太の炭鉱で多少面倒を見た知人を頼って、当時の美唄市東美唄町清水台に 2 間^ましかない長屋の 1 間^まに一家が同居生活させてもらった。数カ月後に、美唄鉄道の終点である、常盤台駅の近くの一の沢に、炭鉱住宅を支給され住むようになった。最初は六軒長屋の社宅だったが、後に 4 階建ての鉄筋コンクリートのアパートに住むようになった。昭和 38（1963）年まで、そこで過ごすことになった。

家財道具を樺太ですべて捨てて来たので、着のみ着のままだった。家具類は、小学 5 年生の私が父の手伝いをして、炭鉱で使った火薬の空き箱にカンナをかけ、ノコギリで切り、ノミでくり抜いたりして、テーブル、机、椅子等を作った。その時の経験でカンナ、ノミ、包丁などを研^とげるようになった。日本剃刀、バリカン^{かみそり}も研ぐことができるようになった。ノコギリの目立てもできた。小学校 6 年生ぐらいから、常盤台駅より奥の二の沢の焼き場（火葬場）近くの山頂^{いも}に芋、南瓜、トーキビ^{かぼちゃ}、野菜畑を作った。肥料にするための人糞を入れた 1 斗缶を背負って山の上まで行った。だから長い間、ジャガイモ、南瓜、トーキビは聞いただけでもうんざりで、食べたくなかった。

以上が、私が過ごした戦後の子ども時代の生活の一部である。まだ見ぬ日本に引き揚げ、生きるのが精一杯の生活を強いられた。特に、小学校に入学して 4 カ月ほどで、もっと楽しいはずの多くの仲間たちとの交わり、もっと豊かさを育むはずの体験が奪われ、一番大切な人生の土台作りの貴重な小学校生活の半分近くが不当にも奪われた。

人間の発達に応じた十分な教育を受け、人間として生まれたからには、その人の才能の開発、人格の完成に向けて成長できる権利を保障し、徹底して貫くことが出来るのを保障しなければならなかったと思う。不当な人生を送らされても個人責任で埋合せをしなければならなかった。こんな理不尽なことがあって良いのだろうか。「お前がこのような時代に生まれたのが不幸なのだ。」と。

戦争は、人間と人間が殺し合い、楽しい幸福な生活を奪い、他国の人がいかに人間として劣っているかを教え込まれその人たちを殺しても平気と思わせ、強制的慰安婦問題のように、他国の人の人権を奪っても何ら恥^はじることがないと思わせる。本当に恐ろしいことである。国民にこのような生活を強いた戦争指導責任をあいまいにして、「あの戦争は自存自衛の戦争であった。正義の戦争であった。」とうそぶき、この戦争を指導した戦犯たちを讃美する人たちが堂々と返り咲いているのを見過ごすことはできない。二度とこのような戦争をしないと誓ったのではなかったのか。世界に誇り輝く憲法9条を作ったのではないのか。この様な歴史を繰り返させてはなるまい。

しかし、この様な辛い、苦しい生活せざるを得なかった中で、本当に多くの人たちに助けられ、言葉では言い表せない深い人間愛を味わい、何とか生き、家庭を持つまでになった。そして今は、子どもたち、孫たちに囲まれて毎日が素晴らしく、充実している。多くの人と交わり、人間は素晴らしいと思う気持ちでいっぱい、今では幸せに暮らし、この年齢まで生きてくることができた。このことを最後に付け加えさせて頂き、お世話頂いたことに深く感謝を申し上げたい。

(ますもり　じゅんいち　昭和13(1938)年　旧樺太・本斗郡内幌町生まれ)